

「わたし出すわ」

2009（平成21）年9月2日鑑賞<アスミック・エース社内DVD試写>

監督・脚本：森田芳光

山吹摩耶／小雪

魚住サキ（摩耶の高校の同級生）／黒谷友香

道上保（摩耶の高校の同級生、市電の運転手）／井坂俊哉

川上孝（摩耶の高校の同級生、マラソンランナー）／山中崇

保利満（摩耶の高校の同級生、養魚試験場の研究員）／小沢征悦

平場さくら（摩耶の高校の同級生、専業主婦）／小池栄子

溝口雅也（仲介屋）／仲村トオル

道上かえで（保の妻）／小山田サユリ

川上たみ（孝の母）／藤田弓子

摩耶の母／天光眞弓

2009年・日本映画・110分

配給／アスミック・エース

<タイトルは抜群、アイデアも出色だが>

『待つわ』は1982年にあみんが歌った大ヒット曲で、今でも「私待つわ いつまでも待つわ」のフレーズが心地よく耳に残っている名曲。それとよく似た（？）本作のタイトル『わたし出すわ』は、プレスシートの中で森田芳光監督が「タイトル自身がコンセプトですから」と語っているとおり、大切なキーワード。そこで小雪主演の映画だと聞けば、誰だって一体小雪は何を出すの？と興味を抱くはず。

事前に調べてみると、何と小雪扮する山吹摩耶が東京から故郷の函館に戻り、高校時代の同級生たちと出会う「わたし出すわ」と切り出すのは、お金。摩耶はなぜそんな大金を持っているの？その疑問は当然だが、その答えはいろいろとありうるはず。したがって、それ以上に大きい疑問は、摩耶はなぜ次々と同級生たちにお金を出していくの？ということだ。

そんな目を引くタイトルは抜群だし、高校の同級生たちに次々とお金を出していくというアイデアも出色だが、実は同じお金をテーマとした映画でも私は蒼井優が主演したタナダユキ監督の『百万円と苦虫女』（08年）の方が面白かった。さて、あなたは？

<冒頭のつかみの出来は？>

函館の高校を卒業して上京したものの、数年後故郷へUターン。そんな例はいくらでもあるが、その理由は千差万別。しかし、摩耶の場合はなぜ戻ってきたの？それを容易に明かさないとこが、本作のミス？

映画は冒頭、摩耶の引っ越しのシークエンスから始まる。若い女性一人の引っ越しだから、普通は慎ましいもの。現に摩耶が引っ越ししてきた部屋はいわゆるアパートだから、同じ年頃のOLと同じであら普通。ところが、作業終了後引っ越し作業員の男性2人が、「これ気持ちす」と言われて小さな封筒を受け取ったが、主任の封筒の中には10万円も入っていたからビックリ。「10万円なんてもらえないですよ」と慌てて返しに戻ったが、そんな主任に対して摩耶は「では、そのお金を有効に使っていい思い出を作ってください」とシャレたひと言を。なぜ摩耶は10万円もの心遣いを？そこまではまだいいのだが、部屋を出て行った後、主任は部下の男性から「1万円もの大金が・・・」と聞かされたから、こりゃ一体ナニ？

テレビニュースで1kgのゴールドバーが数件の民家の郵便ポストに投げ込まれていたというニュースが流れている風景とあわせて、この冒頭のつかみの出来は？

<お金への反応あれこれー人間観察 その1>

摩耶の同級生5人は、男が3人、女が2人だが、摩耶が「わたし出すわ」と切り出した時のそれぞれの反応が面白い。というより、それを描くのが本作の狙い。そこで、本作についてはお金への反応あれこれをテーマとし、本作が描く人間観察を私なりの視点で評論したい。

摩耶が函館に戻り、最初に連絡をとった（接触した）のは、市電の運転手をしている道上保（井坂俊哉）。道上を通じて同級生たちに歓迎会（？）を呼びかけたが、急だったこともあり集まったのは道上だけ。道上の夢が世界の路面電車めぐりだったことを覚えていた摩耶がその話を切り出すと、道上は「今さらお金もないし、このままで十分」と答えたが、そこで摩耶が「そのお金、私が出してあげようか」と切り出したから道上はビックリ。その場は冗談話として終わったが、数日後道上のマンションに届いた小包の中には200万円と世界の路面電車の資料が入っていたから、道上はさらにビックリ。また道上以上にビックリしたのは、妻のかえで（小山田サユリ）。夫と摩耶が怪しい関係では？と勘ぐったのは当然だが、本作ではこのおカネがきっかけで道上家崩壊（？）のサマが描かれるから、それに注目。

<今ドキ、こんないい関係ってあり？ー人間観察 その2>

摩耶が次に「わたし出すわ」と切り出した同級生は、栄光のマラソンランナーでありながら、今は故障のためかつての走りができなくなっている川上孝（山中崇）。話の中でアメリカの有名な医師の手術を受ければかつての栄光を取り戻せるかもしれないことがわかるや否や、摩耶が切り出したのがこのセリフ。しかしこれは、道上に出してやった200万円とはケタが違うはず。摩耶はなぜそんな申し出を、いとも簡単に？

森田芳光監督はその申し出を受けて川上がどのように悩んだのかについては描かず、アメリカに渡り手術に成功し、日本に戻ってきて自信を取り戻す川上の姿を描くだけ。私が考えるに、きっと川上は摩耶の「わたし出すわ」がうまく成功した稀有な事例？

ちなみに、摩耶は川上の母親たみ（藤田弓子）を自分の母親のように思い懐いているよう。そのため、川上の留守中でも家を訪ね、たみの手料理を食べたりしているが、今ドキこんな人間関係ってあり？そんなごく常識的な疑問はまだしも、たみが自分の収入の範囲内で株をやっていることを知ると、摩耶は「この株は上がるから買いなさい」とアドバイス。こんなことをすれば人間関係が壊れていくきっかけになるのは必至。私はそう思うのだが、なぜ森田芳光監督はそんなシーンを？そんなこんなを含めて、私には摩耶の行動は、あまりにも不可解。

<同級生にはすごい学者もー人間観察 その3>

2008年NHK大河ドラマ『篤姫』で、西郷隆盛役を演じて抜群の存在感を示していたのが小澤征悦。その小澤征悦演ずる同級生の保利満は養魚試験場の研究員で、魚が反応して送る信号を人為的に作る研究をしていた。私にはよくわからないが、それが成功すれば遠くの水域から魚を呼び寄せることができるから、国の漁業水域をも無にするようなすごい研究らしい。それがホントに日本の国家・国益に役立つ研究であればいくらでも研究費が出るはずだが、どうもそこらあたりが微妙らしい。

道上や川上に対して摩耶がお金を出してやっていることを既に聞いている保利は、摩耶に対して「研究費を出してくれるかい」と冗談まじりに言うと、摩耶はいとも簡単に「出すわよ」ときたから保利はビックリ。もっとも、保利がホントに摩耶に対してそのお金を期待したのかどうかについては、その後保利との接触を試みる怪しげな中国美女が登場したり、そのバックにいる自信満々の仲介屋溝口雅也（仲村トオル）が登場したりと、地方都市では想像もできないようなストーリーが展開していくから、それに注目。同級生の中にはすごい学者もいるものだが、さて保利の研究とカネと女のバランス感覚は？万一それが崩れてしまうと、大きな国家的損失だが・・・。

<黒谷友香は小雪以上の存在感？ー人間観察 その4>

パナソニックのTVコマーシャルで日本人離れした肢体を披露している小雪だが、本作では大金を持っているにもかかわらず、質素な家、地味な服装、化粧つけない顔に徹している。したがって、小雪本来の華やかさを封印しているが、そんな小雪に代わって華やかさを見せつけ、かつドラマティックな人生模様を見せつけるのが黒谷友香演ずる同級生の魚住サキ。摩耶の生き方は同級生たちにも私にも謎に包まれているが、サキの生き方はわかりやすい。自分の目の届く範囲内で自分が一番の美女と信じ、いい男を捕まえようと精一杯の努力を続けてきたサキは、今地元有力企業の社長の妻に収まり、贅沢な生活をしている。したがって、サキは今幸せの絶頂にあり自信満々。しかし、ある日夫が突然死亡し、会社にも怪しげなうわさが飛び交うと・・・？

そんなサキに対する摩耶の言葉は、何と「私の全財産、サキに残したいの」ということ。そして、なぜ摩耶がそんなに大金を持っているのかを確かめるように、摩耶のアパートを訪れたサキが受け取ったのは、約1700万円相当の5個の金塊。とにかく、摩耶のやることは、ワケわからん。さて、そんな金塊を受け取ったサキの、その後の生きざまは？

<小池栄子が相変わらずの芸達者ぶりをー人間観察 その5>

『接吻』（06年）であっと驚く芸達者ぶりをみせた小池栄子（『シネマルーム20』126頁参照）が、本作でもサラ金業を営む夫まさる（ピエール瀧）を支える（？）主婦さくら役で独特の存在感を見せている。摩耶から「なんでも買ってあげる」と言われたさくらが希望したのは、小型冷蔵庫。ひょっとしてこりゃ、大きい箱と小さい箱のどちらを選ぶと聞かれ、小さい箱を選んだおじいさんの箱には小判が詰まっており、それを聞いて後から押しかけ、大きい箱を選んだ欲張りおばあさんの箱には妖怪や虫や蛇が詰まっていたという『舌切り雀』の昔話の現代版？

夫のまさるはサラ金業で神経をすり減らしているため箱庭をいじるのが趣味だが、摩耶がなんでも買ってあげるというのなら、箱庭協会の会長職を摩耶の金力で買ってこないかと申し出るのだが、こりゃいかかなもの？さて、摩耶はこれにどう対応？摩耶の「なんでも買ってあげる」発言によって、この夫婦関係にも新たな発見と変化が必然的に生まれてくることに。

ちなみに、映画の冒頭ニュースで流れた1kgのゴールドバーの話がその後も再三登場するが、それは一体何のため？摩耶をはじめ女にはみんな秘密があるようだが、さてさくらの秘密とは？

<これはイマイチ理解が難しい>

以上摩耶の同級生5人について、「わたし出すわ」をめぐる人間観察をしてきたが、本作が描くのはそれだけ？近時の秀作である林書宇（トム・リン）監督の台湾映画『九月に降る風』（08年）をはじめとして青春群像劇の名作は多いが、本作が青春群像劇と言えないことは明らかだ。するとやはり、「わたし出すわ」をめぐる人間模様とその先に見えてくる同級生たちそれぞれの未来を描くのが本作のテーマ？そこで、イマイチこれは理解が難しいと思うのが、植物人間状態となったベッドに横たわっている摩耶の母親（天光眞弓）と摩耶とのしりとりを中心とした「対話」シーンが再三登場することだ。

摩耶はなぜこんな大金を持っているの？それは最後まで謎のままだが、摩耶は母親との「対話」を通じて一体何を求めているの？それも私にはよくわからないから、母親との対話シーンの意味はイマイチ理解が難しい。

他方、摩耶が同級生に対して「わたし出すわ」と切り出す際には、必ず高校時代のあの場面、この場面の回想シーンが登場する。しかし、高校を卒業して10年近く経てば、普通そんなシーンを克明に覚えていないのでは？したがって、摩耶が「わたし出すわ」と切り出すきっかけとして、あの場面、この場面を回想するのはアイデアとしては悪くはないが、あまり現実味がないのでは？

<「わたし出すわ」の実践が広がれば>

本作における最初の「わたし出すわ」の実践は道上に対するもので、金額は200万円。日本は格差社会、格差社会と騒いでいるが、アメリカはもっと大きな格差社会。しかしアメリカでは億万長者には社会的責任や寄付という概念が伴っており、マイクロソフト社を引退したビル・ゲイツは妻のメリンダ・ゲイツらと共にビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団という慈善団体をつくり、2005年には国際団体「ワクチンと予防接種のための世界同盟」に、民間としては最大規模の7億5000万ドルを寄付している。したがって、赤い羽根募金から始まり、お金の規模こそ違っても「わたし出すわ」は金持ちが貧乏人かにかかわらず大切な実践。現に私だって、あのケース、このケースで「わたし出すわ」を実践している。

私は森田芳光監督作品として本作をあまり評価しないが、本作が「わたし出すわ」の意味を考えるきっかけとなり、「わたし出すわ」の実践が広がれば、大いなる価値があると思っている。